

東日本大震災から9年

これまでの歩みとこれから

東日本大震災から9年。
コープは「忘れない」「伝える」「続ける」「つなげる」を合言葉に、募金をはじめさまざまな復興支援に取り組んできました。
これまでの復興の歩みとこれからを、東北3県の方々に、それぞれの立場から語っていただきました。

福島県

コープふくしま



みやぎ生活協同組合*
地域代表理事 日野 公代さん

※コープふくしまは2019年にみやぎ生協と組織合同し、日野さんは現在みやぎ生協理事です

不安を一つ一つ取り除いてきた

震災の前年に理事になり、震災と原発事故に伴うさまざまな問題に直面し、手探りながらも活動してきました。放射性物質という見えないものに対し、特に小さなお子さんがあるママたちを中心に、漠然とした不安が募っていました。みんなの不安を取り除くためにどうという情報があったら良いのか、まず自分

も母親として理解したい。その想いから、専門家を呼んで学習会を開催したり、実際に身の回りの放射線を計測したりしました。その時々で必要なことを考え、できる範囲で一つ一つステップを重ね、地道に乗り越えてきた積み重ねが、今に至っていると感じます。

今ここで暮らせるのは全国からの支援のおかげ

原発事故前と同じように自分で育てたものや福島のものを食べたいし、今までのくらしを続けたい。けれど、国や自治体に対する不信任や、知識がない中で誤った情報を信じ込み、不安になることもありました。まず自分たちが本当のことを知らなければ、と繰り返し学び、体験し、理解できたことで、これなら大丈夫、福島で生活できると自分たちなりに消化できるようになったと思います。



コープながのの組合員が「ふれあいサロン」（仮設住宅などで住民同士が交流する場）を訪れ、おやきを一緒に作りました



不安の声に応え放射性物質や甲状腺検査についての学習会を開催、理解を深めています

こうした学習会などの開催は、コープふくしまだけではできませんでした。募金など全国の生協の支援のおかげであり、生協ならではのつながりを実感しています。心が折れそうになっても、誰かが見てくれていて、応援してくれる、と気持ちの上でも支えられました。被災者の方にも大きな助けになっています。

どこにでも組合員がいる安心感を

原発事故の収束にはまだ時間がかかりますし、避難区域が解除され、帰還したとしても以前と同じ生活はできません。さ

さまざまな心配や不安もありますが、どこに行ってもそこに組合員がいる、打ち解けて話ができる安心感は生協だからこそ。これからも、福島の人たちの気持ちに寄り添いながら、活動を進めていきたいです。

東日本大震災復興支援募金

ご協力いただきありがとうございました

お寄せいただいた募金は、被災地での復興支援活動の資金として活用されます。

2019年度 約1,850万円

累計 約5億77万円

(コープデリグループ合計、1月現在)

※2011年度は復興支援募金とは別に、義援金として5億6,672万円をお寄せいただきました

ご協力をお願いします

宅配 OCR注文書やeフレンズで、下記の申込番号と口数をご記入ください。

286443 1口100円

287024 1口10ポイント

286605 1口1,000円

287032 1口100ポイント

287041 全ポイント

(数量欄に1と記入)

店舗 レジまたは募金箱にて承ります。レジではポイントカードのポイントでの募金も承ります。

※1ポイント=1円。この募金は税務上「寄付金控除」の対象になりません

受付
3月3日C週
ご注文分まで
(3月9日週のご注文分まで)

受付
3月20日まで

3月21日から「ふくしま復興応援募金」に取り組みます

上記の方法で受け付けますので、引き続きご協力をお願いいたします。

いわて生活協同組合



組合員活動チーム
池田 亮さん

生協ならではの復興支援

震災の直後から、被災地を回り地域住民からの要望を聞くなど、さまざまな支援活動に携わってきました。9年が経ち、道路や学校などのインフラは戻りつつありますが、まだ約750人がプレハブの仮設住宅で暮らし、復興への道のりは半ば。震災で人口が約25%減少した町もあり、過疎化のスピードも速まったと感じます。

こうした中、いわて生協では毎日のくらしを支え、にぎわいや元気を届ける活動を続けてきました。専用のトラックに商品を積んでお店のない地域を回る「移動店舗」の運行や、仮設住宅で住民がお茶を飲みながら交流できる「ふれあいサロン」の

開催は、全国の生協の皆さんからの募金を活用させていただいています。こうした被災者の要望に寄り添った支援やコミュニケーション作りをずっと続けられたのは、皆さんの支援のおかげであり、生協ならではの「助け合う・支え合う」取り組みだと思っています。

支えてもらった恩返しを

全国で自然災害が多発しています。私たちが経験したことを語り継ぎ、防災・減災の取り組みを発信していくことが恩返しにつながると思います。災害に対する備えは、実際に見て、話を聞くことでヒントになるはず。機会があれば、ぜひ被災地に来てみてください。



移動店舗「にこちゃん号」の車両は募金を元に購入。被災地のくらしを支えています

株式会社スイシン



代表取締役社長
氏家 辰哉さん

復活を目指して

当社は石巻漁港のそばでムキカレイや塩サーモントラウトなど水産物の加工をしており、コープさんとは30年以上お取引引きがあります。ずっと商品をお届けしてきましたが、唯一欠品したのが震災の時。工場が津波で全壊し、2人の社員も亡くなりました。約1年後に工場を再建しましたが、約70人の社員のうち戻れたのは10人ほど。再建後約8年、新たな社員を迎え入れ、成長を促し、「復活」を目指してきました。

組合員が支えてくれた

震災後は人手不足もあり、機械を進めています。それでも人の手や目といった五感は絶対に

に必要。魚の形は同じではないし、ちよつとした問題を見つけられるのは人の感覚です。社員一人ひとりの意識を高め、経験を積むことでスキルアップしています。それができるのも、組合員の皆さんに利用していただけるからこそ。新工場の稼働後すぐに商品を発売していただき、組合員さんに「おいしい」と言ってもらえることは、本当にありがたいです。

安全・安心・おいしい商品で恩返しをしたい

震災後は、より安全・安心な商品を作るために^{※1}ISO22000、^{※2}COCなどさまざまな認証制度を積極的に取り入れてきました。



組合員や職員による産地視察交流で(株)スイシンの工場を視察。鮭を切り身にして干す工程を見学しました



魚を切り身にしたり、パック詰めにする工程は機械で行いますが、最終的なチェックは人の感覚も大切にしています

皆さんに応援していただいたご恩は、安全・安心な商品をお届けすることで返していきたいです。

魚は、同じ魚種でも季節によって脂ののりが変わり、焼く・煮るなどいろいろな調理方法があり、それぞれの地域にいい食べ方があります。多種多様な味わい方ができる魚は日本人に適した食材。骨取りの魚は便利ですが、やはり骨がついたまま焼いて食べるのが一番美味しい。これからも、魚がおいしい、食べたいと思ってもらえる商品作りを続けていきたいです。

※1 食品安全マネジメントシステムの国際標準規格

※2 持続可能な漁業で獲られたMSC認証の水産物が、加工・流通段階でも適切に管理されていることを認証する制度